

「解剖を義歯に生かす」

歯科技工士は患者を診ずに義歯を製作することが多いと思います。日々の経験や先輩の指導を仰ぎながら想像力を巡らせて義歯製作に携わっていることと思います。そんな時、解剖の知識があれば裏付けを持った想像力になると思います。模型の内面には粘膜下組織や骨がある程度決まった位置に存在します。柔らかい・硬い、また、圧排できる・できないや、厚い・薄い。本来なら歯科医師より情報をもらわなければ製作できないのですが、情報の提供方法が分からない先生も多くいらっしゃいます。そのような時に解剖を基に歯科医師に、ここにはこのような組織があるのでこのような印象を採ってほしい、ここが足りないを明確に理由を示し、お願いしていくことで理解しあった解決法となり患者さんにより良い義歯が提供できると考えています。

「生体と義歯」

昨今のデンチャーワークはかなり進歩しており、各術式において精度の高い義歯を散見いたします。

ただし熟練技工士の存在なしにはまだまだ難しいところもあるようです。インプラントの発展とともにデンチャーワークを疎かにしている若い歯科医師も少なからず存在するようです。

普段の義歯製作の経験を歯科医師と共有し、設計・印象採得・咬合採得等を歯科医師の視点、歯科技工士の視点を理解し合い、技工の過程を歯科医師に十分理解していただくのがスムーズで患者さんの負担を軽減すると考えます。

生体及び解剖を理解し患者さんの咬合習慣等を理解できれば模型を読む精度が上がり、印象採得・咬合採得等について歯科技工士から提案することも可能となり、歯科医師と共に患者さんのための義歯製作になると考えています。